

日本人の乾燥地に対する憧憬について

東京大学学術情報学府学際情報学専攻文化・人間情報学コース博士課程 兼橋正人

はじめに

日本沙漠学会 20 周年記念に出版された『沙漠の事典』にて縄田浩志氏は、『月の沙漠』に歌われた情景こそが日本人にとっての「沙漠」、「ラクダ」、「遊牧民」のイメージ、ひいては「乾燥地理解」の原風景になっているのではないかと述べている（日本沙漠学会編, 2009）。また、叢書『乾燥地科学シリーズ』の巻頭言において、恒川篤史氏は、「乾燥地のない日本に住む日本人は、乾燥地に対して憧憬に似た感情を抱いているように思える」とも述べている（恒川, 2007）。このように、日本人の乾燥地に対する眼差しは、「月の沙漠」の情緒的で甘美なイメージと重なり、日本には無いという稀少性もあるが故、憧憬の念を含んでいると看做す者は多い。しかし私はこの一般論に共感できないのである。

「月の沙漠」は確かに童謡として有名である。しかし、その詩の雰囲気日本人一般の乾燥地に対する心象風景に見えるのは、あくまで結果であり、「月の沙漠」によって日本人が乾燥地に対して憧憬を抱くようになったとは思えないのである。もちろんそのような心象風景の形成に「月の沙漠」は強い影響力をもっていたとは思いますが、それが日本人一般に当てはまるわけではないだろう。実際私自身、乾燥地に対して「月の沙漠」の光景が真っ先に思い浮かぶわけではない。

では、日本人の乾燥地に対する憧憬に何が影響を与えているのだろうか。それが本稿で考えたい問題である。

まず最初に考えたいのは、憧憬と好奇心との違いである。しばしば「日本は乾燥地では無い」ことが憧憬の理由として説明されているが、そもそも「無い」だけならば、旅行で乾燥地を訪れればその憧憬は満足して消え失せるのではないだろうか。しかし、現地に滞在経験があるはずの乾燥地研究者までもが、乾燥地への憧憬に言及しているさまを見ると、その感情は「無い」ことから湧き起こるものではないようである。そこに私は憧憬と好奇心との違いを捉えている。つまり、興味・関心にはじまり、対象の獲得を通して満たされる好奇心とは異なり、憧憬は本質的に対象の獲得とは無関係な感情だと思ふのである。

そこで両者の違いは、対象に対する作り上げられたイメージの有無にあると私は考えている。何らかの確立されたイメージを通して対象を捉えようとする姿勢が、憧憬の発端にあると思うのである。そのような確立された乾燥地のイメージの一例として、次に「月の沙漠」よりも一般的であるシルクロードの表象をとりあげてみたい。

シルクロードの表象

シルクロードとは 1877 年のリヒトホーフェンの著書に起源を見ることが出来る地理概念である。つまり、シルクロードの表象は、近代以降に形成されたものである。そして、言葉の指す地域からも明らかのように、シルクロードは乾燥地域を指すキーワードでもある。

この言葉から連想されるのは、井上靖やヘディンの小説、平山郁夫の絵画などであろうか。また、1980 年より放送された NHK の番組「シルクロード」は、日本のシルクロード観を確立した番組として有名である。この番組は、毎回ラクダの隊列が砂漠を横断する光景ではじまっており、砂漠やラクダがシルクロードの象徴的な風景であると認識されていることがわかる。そのような描写からも乾燥地とシルクロードとが無意識のうちに重なっている様子が理解できる。

また、2005 年に新たに「新・シルクロード」という番組が放送されるなど、日本においてシルクロードは人気の高い題材である。しかし、現代のシルクロード地域に目を向けてみると、近年の著しい経済発展もあり、「月の沙漠」のような光景は、ますます非現実的なものになっていることもまた事実である。逆に砂丘とラクダとがセットになった光景は、敦煌のような観光地においてますます気軽に見ることができるようになっている。つまり、従来のシルクロードのイメージは、もはや現実的ではなく、虚構のイメージになっているのである。

もちろん、観光地化を目指す限りにおいては、このような現実とのギャップは問題ではなく、むしろ好奇心を刺激すべく意識的にイメージが作られるものである。しかし、日本人一般が現実とは異なるイメージを抱き続けているというのはいささか奇妙なことでもある。そして、マスメディアが繰り返し歴史番組としてシルクロードを題材にしているさまを見ると、むしろ日本人は意識的に幻想のイメージを固持しようとしているようにも見える。それは、まさに確立されたイメージを通して対象を捉えようとする態度に他ならない。

乾燥地に対する憧憬の根底

そこで、改めて憧憬と好奇心との違いを考えてみたい。私は確立されたイメージの有無を両者の違いとして据えているが、この点からするとシルクロードに対する意識もやはり好奇心ではなく憧憬ということになる。では、対象の獲得を通して解消され得る好奇心とは異なり、憧憬は一生抱かれ続けるものなのだろうか。そして、憧憬によって描かれるイメージもまた変化することはないの

だろうか。つまり、シルクロードのイメージは今後も砂丘とラクダとがセットになった光景であり続けるのだろうか。その点を考えるために、なぜ対象に固定的イメージを抱こうとするのかという問題を考えてみたい。そこで本稿では、乾燥地に対する憧憬の歴史的発端でもある近代列強各国の植民地に対する眼差しをとりあげてみたい。

まず、オリエンタリズムとしてサイード(1986)が批判したような近代の列強国によるイメージの固定化は、多くの場合支配関係を伴うものであった。このような歴史的事実からすると、イメージの固定化には支配意識が関係しているように思われる。確かに、シルクロードの概念もまた近代の植民地時代のなかで生み出されたものであり、支配意識と無関係ではないことは明らかである。つまり、好奇の目が支配意識と結びついた結果が憧憬である、といえそうである。

しかし、憧憬は対象の獲得とは本質的に無関係であると先に述べたように、支配が成功しようがしまいが、それによって憧憬が解消されることはない。近代列強各国が植民地を手にしたからといって、オリエンタリズム的視点を放棄したわけではないように、憧憬は行為とは関係なく、抱く主体の意識に依存している。すなわち、主体の意識が変わらない限り、憧憬は一生抱かれ続けると思われる。つまり、日本人のシルクロードや乾燥地への憧憬に変化のきっかけがあるとしたら、それは日本人の意識の内にあるということである。

そこで、改めてシルクロード関連作品を手にとると、シルクロードの言葉を有名にしたスヴェン・ヘディン、井上靖の「楼蘭」に出てくる張騫、仏教伝来の立役者である玄奘など、シルクロードの代表的人物は冒険家・探検家と称するにふさわしい人物であることがわかる。「月の沙漠」の王子様とお姫様の2人もまた、危険を顧みずに砂漠へ進もうとする点で冒険家的要素をもっている

いえるだろう。つまり、日本人の乾燥地観に強い影響を与えていると思われる作品の主人公は、総じて強い意志をもって目的を果たそうとする冒険家なのである。そこから考えられることは、これらの作品によって日本人のシルクロードや乾燥地に対するイメージが形成されたという裏には、このような主人公の冒険家的な態度への憧れがあるのではないだろうか、という点である。つまり、シルクロードや乾燥地に対する憧憬を紐解くきっかけは、冒険家的な生きざまにあると思うのである。

そのように考えると、日本人の乾燥地に対する意識の変化のきっかけは、冒険家的生きざまの実践にあるといえるだろう。すなわち、冒険家的生きざまの対極にあるモラトリアムの生きざまからの脱却である。かつて小此木(1978)が指摘したように、戦後の高度成長期以降、日本社会に蔓延するようになったモラトリアム人間は、乾燥地関連作品の主人公に憧れを抱くに足る素質を持ち合わせているようである。このようなモラトリアム人間にならないという決意こそが、まず、これまでの乾燥地観に変化を与えるきっかけになり得るのではなかろうか。乾燥地への憧憬と戦後日本の根底意識といわれるモラトリアム性とのつながりを意識し、自らの生きざまを見直していくこと、そこに新しい乾燥地研究のはじまりもあると思うのである。

参考文献

- 日本沙漠学会編(2009):『沙漠の事典』丸善,104.
- 小此木啓吾(1978):『モラトリアム人間の時代』中央公論新社.
- サイード,エドワード.W.(1986):『オリエンタリズム』平凡社.
- 恒川篤史編(2007):『21世紀の乾燥地科学—人と自然の持続性—』乾燥地科学シリーズ1,古今書院.